慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「実在との邂逅」：現象学的な考察と言語論的考察における反・自然主義的視点
Sub Title	Encounter with reality : an anti-naturalistic point of view in phenomenological as well as in linguistic investigations
Author	岡本, 由起子(Okamoto, Yukiko)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1996
Jtitle	哲學 No.100 (1996. 3) ,p.101- 123
JaLC DOI	
Abstract	According to Husserl, we have primordial experience of objects in perception, more specifically in sense-experiences. We encounter reality in the field of sense-experiences as human experiences. The concept of hyle points to these sense-experiences as functional material for intentional experience. In this article, I attempt to demonstrate that the entire study of perception, even in its hyletic phase, should be free from any relation of dependence on empirical sciences. Still, there arises a suspicion whether phenomenological transcendental inquiries can be fully vindicated as an independent enquiry. After refusing naturalism, should we take a linguistic turn instead? I try to show that we cannot deny a transcendental feature within our linguistic investigation itself. We can see this for example in later Wittgenstein's insight into the necessary conditions surrounding possibilities of linguistic phenomena.
Notes	100集記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000100-0101

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「実在との邂逅」[1]

——現象学的な考察と言語論的考察における反・自然主義的視点——

岡本　由起子*

Encounter with Reality

—An anti-naturalistic point of view in Phenomenological as well as in Linguistic investigations

Yukiko Okamoto

According to Husserl, we have primordial experience of objects in perception, more specifically in sense-experiences. We encounter reality in the field of sense-experiences as human experiences. The concept of hyle points to these sense-experiences as functional material for intentional experience. In this article, I attempt to demonstrate that the entire study of perception, even in its hyletic phase, should be free from any relation of dependence on empirical sciences. Still, there arises a suspicion whether phenomenological transcendental inquiries can be fully vindicated as an independent enquiry. After refusing naturalism, should we take a linguistic turn instead? I try to show that we cannot deny a transcendental feature within our linguistic investigation itself. We can see this for example in later Wittgenstein's insight into the necessary conditions surrounding possibilities of linguistic phenomena.

* 慶應義塾大学文学部非常勤講師（哲学）

1 はじめに

「実在との邂逅」[2] とは，誰かが，何かに出会うということである．それは，なんらかの意識の出来事を示唆している．すなわち自己意識のある存在の認識的なできごとを意味する．その意味で，この考察からは，たとえば知覚だけを物理的に再現するといったような試み（桶の中の脳）[3] は，予め排除されている．そして，人間的経験のある側面が語られることが示唆されている．「実在との邂逅」は，意識と実在世界との接点への一つの現象学的な表現でもある．意識と実在世界との接点は，さしあたり，感覚的経験にあると言えるだろう．それが人間的なできごとであるとは，感覚的経験がそれだけ切り離されて，考察されるのではなく，「志向性」のもっとも基底的な層として，全体としての人間的経験の一側面として考察されるということを意味する．

1-1 現象学的立場について

本稿では現象学的考察に基づいて「実在との邂逅」について考えていきたい．「現象学」とここでいうのはフッサールの現象学を指し，主として『イデーンI』の超越論的現象学を参照しつつ，とりわけ感覚的経験に関わる「ヒュレー」の概念が示すものに考察の焦点を当てていく．フッサールによると経験の原型は，知覚にあり，その基底的層が「ヒュレー的なもの」と表現されている．知覚は，単に経験のさまざまな類型のうちの一つではなく，フッサールにおいては，「最も原本的な[4]，直接的明証」を与えるという意味で「根源的経験」を意味しているのである．したがって，その知覚のもっとも基底的な層をなしているヒュレーについて論じることは，とりもなおさず「実在世界との接点」の原型について考察するということになるだろう[5]．

「ヒュレー的なもの」とは，色や，音，形態，触覚，などの感覚野に現

れる「素材」的なものを意味している．このように，ヒュレーとは，人間の感覚器官に即して成立しているもっとも基本的な感覚的経験のことであると解釈することができる[6]．ここで，フッサール現象学の「志向性」と，ヒュレーの関係について次のことを確認しておきたい．志向性とは「意識は常に何物かについての意識である」という意識の特性を表す概念であるが，この意識の志向的構造は，さらに自我の意識作用としてのノエシスと，それの相関者であるノエマ（対象的なもの）によって説明される．ノエシス・ノエマの構造は，相関的な平行性を示していて互いに不可分であるが，原理的な諸特性は異なり，抽象的には区別して考察される．自我の体験の謂いであるノエシス的なものの基底に，ヒュレーつまり，感覚的経験があるのである．そうして，フッサールが志向性という題目とは，「意識の根本的特性を言い表し，全ての現象学的問題，ヒュレー的なものすらも，そこに表示されている」[7]と述べるとき，彼は，経験が全体として現象学的エポケーを被って，その事実性が括弧にいれられるなら，感覚的経験もまた，超越論的に考察されることを宣言しているのである．（客観的な色や，音や，形態その物は，個物や出来事とともに，外的な事物世界に属して，意識を超越するものであるわけだが，それらについての経験はすべてノエシス的な体験に属するのである[8]．色そのもの，音そのものなどが射映してきて，その色射映，音射映といった素材をノエシスが生化(beseelen)し，その現出システムの中に色や音が現出する，と考えられる．すなわち「ヒュレー」とは，単なる「感覚」を意味するのではなく，意識の機能的側面を重視する観点から捉えられた「感覚的素材」のことであり，志向性の基底層を表示するためにフッサールが選び出した用語なのである[9]．）

1-2　問題提起

本稿では，そうした感覚的経験をめぐる二つの問題について考察を試み

たい．第一に，感覚的経験は，はたしてフッサールの言うように現象学的超越論的問題なのか，あるいは経験的心理学的問題か，という問題がある．また「超越論的」とは，さしあたり，「自然主義的」と対置される方法論的態度を示し，意識を経験的，心理学的な出来事に還元しない態度のことであると理解しておきたい．そして「超越論的方法」とは，「実在性」についての判断を括弧にいれる現象学的還元を意味するわけであるが，さらに個々の事実的な主観を超える視点を与える方法であると考えられる．したがって，このような考察においては「実在との邂逅」もまた個々の事実的な主観の心理的な感覚的経験の考察を意味しないということになるだろう．しかし，「超越論的」という言葉は，すでに多くの論議が示すとおり，一義的とはいい難い．現象学的超越論的方法は，超越論的主観性による反省という独自の方法論的立場を意味し，この超越論的主観性については，周知のような諸困難がつきまとっている．しかしながら今回はこの問題に立ち入らない．その理由の一つは，「超越論的主観性」が，それ自身として論ずべき問題であって本論の主題ではないからだが，もう一つのより重要な理由は，それを論じるという道を通らずに「超越論的」というべき方法と態度について考えてみたい，という動機づけが，第一の問題の考察に関してはあるからである．そしてたとえ超越論的主観性の問題を先送りにしても，「超越論的方法」に何らかの正当性を確保しない限り，「ヒュレー」の考察が，経験的，実証的考察に任されるべきであるという主張に反論はできないからだ．これは第二の問題と関わる論点でもある．

第二の問題は，「実在との邂逅」をめぐる現象学的考察と言語論的考察との関係についてである．この問題を考察する際の言語論的立場とは，おおざっぱに言えば，「実在世界との邂逅」は意識の出来事ではなく，実在世界と言語との関係という問題であって，志向性は外的世界への言語的な指示の問題に帰着するというものである．これは，意識の問題はすべて言語的な問題へと読み換えられ（あるいは還元され）なければならない，と

する立場でもある．この立場からは，そもそも「志向性」を言語的指示の問題に置き換えることによって，超越論的方法を巡る問題も回避することができる，とも主張され得るだろう．それは言語論的転回を成し遂げた哲学のとる立場と考えられる．ところで「感覚的経験」についての分析哲学的考察においても，感覚刺激を原子論的に個別化することはできないことや，言語に汲み尽くされるものではないこと，などがすでに確認されている[10]．そこで，言語論的転回から，さらに自然主義的な転回が必要で，認識を自然科学的な心理学の研究の一部とするべきだという提案もなされているわけである[11]．ここでは，「志向性」の問題が言語的なものに還元され得ないということを示したい．そしてさらに言語論的立場からも，その自然主義的転回への反論がどのように可能であるかを検討してみたいと思う．それによって，現象学的な「感覚的経験」の考察と，言語論的考察との比較を通して，言語論的研究そのものにおける自然主義的な経験を超える視点の可能性について考えていきたい．

2　現象学的考察と自然主義的転回

2-1　フェレスダールの自然主義的傾向について

現象学的な知覚論をめぐっては，ダグファン・フェレスダールに代表されるような自然主義的と言える一つ解釈がある[12]．その解釈は，フッサールが否定した「知覚の因果説」を，「ヒュレー」（感覚的素材）のレベルにおいて改めて採用することを提案し，いわば（感覚的経験に関する）現象学的考察に代えて実証的考察を復権させようとする試みであると言えよう．フェレスダールの提案は，次のように要約できる．先述したように，フッサールは，色そのものや音そのもの，形態そのものなどは，客観的な外的世界に属するものであると考えた．それらが，われわれの意識に射映してきて，色の現出として経験される，それが現象学的な意味での感覚的経験である．

フッサールのこうした考察は，われわれの経験自体に因果的法則に支配された物質的局面があるということを意味している，とフェレスダールは解釈する．そうであるならば，「ヒュレー」（感覚的素材）は因果的な自然主義的研究に委ねられるべきだと，彼は提案するわけである．フェレスダールによれば，なるほどノエシス・ノエマという経験の構造は，現象学的研究の対象であるが，ノエシスの境界を設定し，同時にノエマの境界条件となっているヒュレーについては，物質的な局面として扱われ得るというのである．

フェレスダールは，ヒュレーを，「感覚器官が刺激」されてから，（因果的に刺激反応の神経系統のプロセスを辿って）生じるものとして語っている．そして「ノエシスがヒュレーを知らせる (inform)」ことによって，感覚的経験が成立するのだ，と言う[13]．ここには一つの誤解があるのではないかと私は考える．フッサールにとって，色や，音や，形態そのものは，空間的なものであるが，色などを現出させる感覚的経験は空間的なものではない．それらは，視覚や，聴覚などの感覚野にしたがって「具体的な体験的統一」にまとめられる．感覚的経験における色の現出や，音の現出，形態の現出そのものは，経験にとって有意味な統一であっても，刺激反応の神経系統のプロセスではないのである[14]．感覚的素材（ヒュレー）は，それだけ孤立的に取り出すことのできる物理的ないかなる物質過程でもない．フッサールは，物理的存在と，主観的な存在つまり，直接的経験の中で現出している存在との間を因果性の帯で繋ぐということは，因果性の濫用であって，それは神秘的な紐帯ですらあるのだと言っている[15]．

構成する主観性と構成された世界との関係は，決して因果的関係ではありえない．視覚は，眼球の中には存在せず，視覚像そのものは，脳の細胞を探ってみても見つからないということができる．

フッサールは確かに，ヒュレー的契機は，ノエシス的な把握によって生化される，という言い方をしている[16]．このようなフッサールの言い方

は，フェレスダールにおける「ヒュレーをノエシスが知らせる」といった捉え方を許容するかに見える．しかし，われわれは，感覚的経験を端的に，持つにすぎないのである．例えば，「空の青さ」に気づくことは，私のなかの「青さ」などの感覚的素材について私が知る，ということではない．

フッサールによれば，感覚的素材自体は，決して知覚されることも，これが対象的に把握されることもないのである．感覚的素材は，物質の世界に属する空間的なものではなく，ノエシス的な全ての作用とともに体験に属し，それと，色自体，音自体，形態自体など客観的な空間的な事物に属するものとは，原理的に区別されなければならない(17)．ノエシス的な把握とはそうした素材的な感覚を意味的統一として意識する以上のことではないのである．なるほど，ノエシスとヒュレーについてのフッサールの言説は，二元論への重要な疑念を呼び起こす(18)．しかし，その後の発生的現象学において考察されているように，それらは一つの根源的な体験の流れのなかに分かち難く結びつけられるものなのである．機能的観点から見れば「感覚的素材」は，全体としての人間の経験である知覚を成立させる「契機」として位置づけられるのである．したがって，体験（コギトの領域）と，空間的事物の領域との間におかれたこうした区別は物理的なものではなく，いわば論理的なものである．そしてまた，発生論的な論理的区別というべきものであるといえるだろう(19)．

では，こうしたノエシス的な経験の基底をなす感覚的経験は，経験の志向的構造において，その相関者であるノエマ的な（対象的な）ものとは，どのような関係にあるのか．色の現出や音の現出は，体験であるが，現出してくる色そのもの，音そのものは，ノエマ的な対象の側に属している．対象的なもの，それがノエマと呼ばれる．

ノエマとは自我の意識作用の相関者である．

同じ事物についてわれわれは，いかようにもその捉え方を変容させる．

「葉の茂った樹木」と見たのが，芝居の貼り子の絵であるということもある．あるいは同じ樹がもっと具体的に「林檎の樹」であると分かることもある．フッサールのノエマの概念は，一つに，このように，同一の対象について別様に言えるという可能性の条件を示す概念であると言えよう．同一の対象に対して，複数のノエマが構成されるわけである．そこで重要なことは，自我の体験において感覚的経験がどのように多様でも，ノエマ的対象には対象的な統一が保持されるということである．

このように，ノエシスとノエマは，決して，一対一の鏡のような対応をしているわけではない．感覚的経験とノエマの関係は，一方に事物ノエマの統一があるとすれば，他方に「ヒュレー的な射映の多様性」つまり感覚知覚の多様がある，という関係にある．これについてフッサールは，「…たとえば，われわれは，Nというノエマの全てに，必ず〈Nについての意識〉をおきかえるというふうにはなっていないのである」というように述べている[20]．

知覚ノエマの成立については，さらに複雑なノエマの構造に言及しなければならないが，ここでは，「実在との邂逅」という現象について，それが一つの感覚的経験に対して一つのノエマがあるというような図式では捉えられないことを確認するに止めることにする．

ノエマ的な意味が表現作用によってロゴスにまで高められる可能性を示すとしても[21]，ノエマの「下部層における変動の全次元」が表現する意味作用に汲み尽くされるのではない[22]．したがって，感覚的素材と言語の関係もまた，個別の感覚的経験が要素的な命題に一対一対応に写し取られるという図式で考えることはできない．

2-2　志向性と言語論的考察との関係について

フェレスダールは，ノエマをフレーゲの意義(Sinn)と比較することによって，ノエマ的な意味を概念的に捉えようとしたわけである．さらに発

展させてそれを徹頭徹尾「言語的なもの」とする解釈がなされ，意識の志向性の全体を，言語的なものへと一気に解消することが試みられてきた．トゥーゲントハットが，フッサールの意識の分析は，結局他動詞とその目的語との関係の分析であると断じたのはそのよく知られた例と言えよう[23]．こうした言語論的な方向への志向性の解釈は，いわば言語外的な，あるいは前言語的なものであるヒュレー（感覚的素材）をフェレスダールのように，自然主義的な考察に委ねるか[24]，志向性を徹頭徹尾概念的なものと考えることによって知覚そのものまで概念的なものとして解釈しなおす方向に行くかであろう．知覚を概念化するということは，感覚的素材の「所与」の受動的な側面が志向的経験構造全体に対して持つ論理的役割を見損なうことでもあるだろう．ヒンティッカは，こうした方向に考察を進め，「志向性は内包性である」というテーゼを掲げている[25]．

しかし，ここで扱おうというのは，直接フッサールの「志向性」概念に加えられる言語論的脱意識化の可能性ではない．トゥーゲントハットやヒンティッカらのフッサール批判を検討することではなく，ここでの目的は言語の側から出発して感覚的経験は，いかにして人間の経験として，「実在との解逅」の問題たり得るかを考えることである．

3　言語論的考察について

ここでは，ウィトゲンシュタインの感覚言語の議論を参照することによって，この課題についての考察をすすめたい．というのも，現象学的な感覚的経験の考察と，ウィトゲンシュタインが言語ゲームの概念によって，明らかにした感覚的経験の「直示的定義の不可能性」の問題との間に，ある関連性が認められるように思われるからである．もちろん両者の間には，議論の枠組みや，方法論的基本的立場などについて隔たりは大きく，単純に関連づけることはできないであろう．しかし哲学的問題意識において重要な共通点が見いだせないだろうか．

3-1　感覚的経験の言語的指示の問題

ウィトゲンシュタインは，周知のように言語の意味を一様に「直示的定義」によって説明しようとする考え方に対して疑問を投げかけている[26]．とりわけ感覚知覚が，それを表す語によって指示され命名されることによって説明されるという考えを排除している[27]．語とその対象は，鏡のような一対一の関係にはないと考えるからである．

そして，感覚が「私的」であるかどうかも，一つの疑似問題として示される．なぜなら，ウィトゲンシュタインによれば，私の感覚について，「知る」ということが無意味だからである．私の感覚は，端的に「持つ」ものであるからだ．色の感覚についての，次のような考察が『哲学探究』にある．

> 「君は真っ青な空を見上げ，そして，君自身に対して叫ぶ：〈空の何と青いことよ！〉—君が，哲学的意図を持たないで，自然にそう叫ぶとき—その言葉は，〈この色の印象は私にのみ属しているのだ〉という意味で，言われたのではない．そして君は，場合によってはこの叫びを他人に向けるということに何の疑念ももっていない．」[28]

また，この叫びが，自分の内面の感覚への指示ではなく，外界の空のことを言っているということは明かだ．「空の何と青いことよ！」と，色の感覚との間にあるのは事象的な関係ではなく，そこにあるのは，語とその使用の「規則」の関係であるというのが，ウィトゲンシュタインの考え方である．直接的な感覚的経験について，語る場合も，科学的考察は的はずれであるという考え方は[29]，フッサールの現象学的考察に関連づけることのできる哲学的問題意識を示しているということができると思う．ここで，ウィトゲンシュタインのもう一つの例を見ておこう．

「私的体験において本質的なことは，実は，各人がそれぞれ私的体験の固有な事例を持っている，ということではなく，他人もまたこれを，あるいは何か別の物を持っているかどうかを，誰も知らない，と言うことである．従って，人類の或一部の人々では或る赤の感覚を持っており，他の一部の人々はそれとは別の赤の感覚を持っている，という仮定は，――検証不可能であはあるが――可能であろう．」(30)

この検証の対象そのものが，あの有名な「かぶと虫」の比喩が示すように，実はなくてもよいものである(31)．これを，フッサールにおきかえれば，感覚的素材について自我はそれを対象として持つのではなく従ってノエマ的なものではなく，端的に経験しているのであり，そもそも感覚を事物のように知るということは原理的な矛盾だということになる．しかしヒュレー的な契機がなくてよいかというとそうではないだろう．ウィトゲンシュタインは，「ばたばたともがいている蠅を見よ」そうすれば「苦痛なるものがはじめて足場を得ることができる…」とも言う(32)．この足場（手がかり）は，言い換えると「痛み」という言葉の使用の基本的な前提条件を示しているのではないだろうか．ここで問題となっているのは対象としての痛み自体，すなわち個々の感覚の内実ではない．

そして，フッサールにおいても，色や，形態の感覚的素材が経験的な個々人の中で，どのような違いを持っているかという個別の主観の経験内実が考察されることはない．感覚的経験を成立させる感覚的素材が，それの成立の条件として，契機として考察されている．それは，フッサールの超越論的考察が，個別の経験的個人の知覚というものを初めから括弧に容れているからである．フッサールは超越論的現象学への途上で，次のように述べている．

「したがって，私のコギタチオとしての，コギタチオの明証，つまり，

私の経験としての経験の明証が要求されてはならないのである．すなわち自然的で心理主義的な意味での私の存在(Existenz)を確立するような〈sum〉の明証が要求されてはならないのである．」[33]

ここでは感覚的経験の主観性そのものが，純粋な自我として設定されている．これをウィトゲンシュタインの議論に照らすなら，この設定が必要なのは，個別的な相違は，対象の構成の原理や本質的条件としては無意味であるからだとも言えるのではないだろうか．

3-2　現象学的考察と言語論的考察

ここで現象学的考察と言語論的考察の違いを両者の間の隔てに託して考察する．その隔てについて次のことを確認しておきたい．

「実在との邂逅」は，実は，知覚の根源的明証性という意味で，真理の問題をもその射程に含んでいる．フッサールにおける真理の問題は，命題的な真と偽の問題とは区別され，より根源的な「明証性」の問題へと向かう．そして，この「明証性」に命題的真と偽も依拠するものと考えられている．ウィトゲンシュタインの知覚の概念には，フッサールが真理の問題に関して知覚経験に与えたような特別な地位（知覚の根源的明証性）はない[34]．従って知覚の「明証」の概念は，フッサールとウィトゲンシュタインとの間を隔てる大きな溝の一つと言える．

言語による実在の指示の問題も，いうまでもなく真理の問題と関わる．しかしウィトゲンシュタインの「意味の使用理論」と呼ばれるものにおいては，言語的指示の問題は，一つの言語ゲームにすぎないと言える．「対象の指示」ということが，すでに語の使い方についての知識を踏まえた一つの言語ゲームであるなら，真理の問題は，それもまた「真」と「偽」という語を含む言語ゲームなのである[35]．

両者を隔てるもう一つの溝は，言語の考察に関してである．フッサール

においては，とりわけ『イデーンI』以後，ノエマによる意味の普遍化によって言語の考察への道は断たれているという批判がある[36]．この点に関連して，ダメットの批判を参照しよう．

ダメットは，フッサールをフレーゲと比較する中で，次のように述べている．「言語的意味(meaning)は，意味(sense)と同一化されるものではない．しかし，もし言語から出発するなら，言語的意味に基づいて意味の説明をすることに何の障害もない．しかしフッサールは，反対側から出発する．彼は個々の心的作用の内容から出発する」[37]．そしてフッサールは，「イデア的意味」に到達するが，そこでは言語は何の役割も果たしていない．したがって，フッサールの理論においては，「如何にして語や表現に意味が帰属させられるのか」がわからないとダメットは批判するわけである．ダメットが言及しているのは，フッサールの『論理学研究』における立場である．しかし，超越論的転回後の『イデーンI』においても，フッサールが「ノエマ的意味」というとき，それは必ずしも言語的意味ではなく，言語的意味の問題は非常に限られた範囲（表現作用の相関者）でしか扱われていないことは事実である．フッサールはあまりに性急に言語を切り落として，主観的観念論へと上り詰めたというべきだろうか．フッサールの超越論的方法は，その観念論への方途にすぎなかったのだろうか．しかしながら，そう断ずる前に，超越論的方法と共に言語論の側の問題，つまり「言語」とはなにかという基本的な問題に目を向けたいと思う．

4　超越論的方法と言語考察

感覚的経験についての現象学的考察とウィトゲンシュタインの言語論との比較から明らかになったことは，一つに，言語考察そのものにおいても自然主義的科学的方法が排除されるということであった．

フッサールは，彼の超越論的現象学を，経験的，実証的な心理主義との

対決の中から打ち立てた．したがって，現象学的問題として「実在との邂逅」を考察するなら，それを意識の出来事と言う場合でも，個々の主観的な心理的経験を意味するのではない筈である．フッサールはこのように，個々の経験的主観を超える超越論的観点を「超越論的エポケー」という操作によって確保した．

他方，ウィトゲンシュタインは，感覚と感覚言語を巡る議論に見たように，感覚語の「直示的定義」を捨て，いわばそれを旋回の軸として文法的な考察へと転回することによって，個々の私的な主観を超える観点を確保している(38)．それによって「私的経験」と思われる感覚的経験も，感覚的言語の使用の論理的な条件として考察され得たと言えよう．フッサールもウィトゲンシュタインも共に個々の私的な主観を超える観点を確保する何らかの手だてを必要としたのである．しかし，この二つの考察は，言語に関して全く相反する地点から出発していた．この隔たりは埋まることはないのか．私はこのことについて考える手がかりがウィトゲンシュタインにおける「言語」の概念の拡張ということにあるように思う．「言語」とはそもそもどう捉えられるのか．

ウィトゲンシュタインとフッサールのいずれの場合も「言語」とは，少なくとも各民族で異なる諸国語のことではない．では「言語」とは，言語一般のことであるのか．しかし言語一般といっても，普遍言語や普遍文法を問題としないのなら，そのようなものは想定しにくい．人間一般の日常的な言語的経験が（諸国語の違いを超えて）一定の基本的な機能を備えているとするなら，「言語」の概念とはその機能のことであるかも知れない．そう考えるなら，人間一般の生物学的な同型性が問題となる．ウィトゲンシュタインは日常言語の使われ方を「注視」するが，普遍文法を構想するのではなく，生物学的同型性を論ずるわけでもない．

ところで，超越論的考察との対比で見ると，言語論的考察においては，一見すると意識の座を言語が引き継いでいるかに思われる．意識と呼ばれ

る諸現象は，実は，言語的機能の行使の結果だとされる．既に述べたようにトゥーゲントハットは，フッサールが「志向性」として扱っている意識の様態を「命題的態度」と呼ばれるものと類比的に考え，「知覚する」「述べる」「憎む」などといった他動詞とその目的語の関係にすぎないのだと言ったわけである[39]．しかし，感覚素材に関して本論で考察してきたことや，また感覚的言語の使用の条件を省みるなら，意識と呼ばれる現象も，またそれが生じる際の諸条件も，このような文法的な事柄や，内包性といった概念的なものにに還元しきれないものを含んでいると思われる．（言語は，いわばわれわれの実存と絡み合っている．）

言語に即してこうした事態をある程度まで記述しているのがウィトゲンシュタインの「言語ゲーム」の概念だったのではないだろうか．ウィトゲンシュタインの言語観にもう一歩踏み込んで考えてみたいと思う．感覚的経験をめぐる議論から明白な一つのことは，彼が言語の本性と考えたものとは，もっぱら「公共性」（相互主観性）ということにあるということだ．（そして，フッサールにおける個々の経験的自我の括弧いれという「超越論的エポケー」の操作も，まさにこの「公共性」を別な方途から確保する試みであったとも考えられる[40]．）

ウィトゲンシュタインは，具体的な言語現象のみを注視している．しかし，彼にとって言語は単なる記号ではなく，言語の意味は，語の「指示対象」でもなく，また「同一的な理念的意味」によって決定されるものでもなく，それの使い方にある．たとえば，ある語の直示的な説明が成り立つのは，すでにその語の言語における使い方が明らかなときだけであると，述べられている[41]．言語による対象指示は，言語習得による言語的知識の沈澱というべきものをその前提としているのである．言語ゲームは，言語とそうした沈澱としての言語が織り込まれている行為全体のことである[42]．

このように考えると，ウィトゲンシュタインにおける「言語」とは，単

なる言語文法的な機能以上のもの，記号操作以上のものであって，「生活世界の意味体系」の全容を捉えるものにまで拡大されている．そうした言語の考察は，われわれの経験全体の意味構造の原理的な可能性の条件の考察をも含んでいる．実際，一つの極限的なケースとして感覚的経験をめぐる言語ゲームについて示された考察は，言語使用をめぐる可能性の条件を示したものであったと言えないだろうか．ウィトゲンシュタインの遂行した文法的な考察への転回は，言語ゲームを可能にする原理的な条件を，全体として問い得る視点を与えるところに成り立っているのである．彼が，「現象の可能性に向けられるべきだ」(43) とした文法的考察は，この点で，現象学の意図する超越論的な方法の特色と重なる．したがって，言語に即してわれわれの「実在との邂逅」を考察する場合でも，現象学的考察の場合も，それが経験的なものを超える超越論的視点を要求することが明かである．そしてこの問いは，自然主義的（実証的）心理学的な問いには解消しえないのである．

結　　論

本稿では「実在との邂逅」という意味での「感覚的経験」をめぐる問題を考察してきた．その考察を通して，人間的経験を全体的な経験の意味構造において把握するための方法と態度を，ウィトゲンシュタインはフッサールとある程度共有していたと言えるだろう(44)．ここに，言語論的考察における，自然主義的方途への反論の可能性が示された．

しかし，「実在との邂逅」の根本的意味は，これで尽くされているのだろうか．ウィトゲンシュタインとの溝をうがった，フッサールの「明証」の概念，特にここで問題となる「知覚の根源的明証性」には，対象の存在への端的な確信（原信憑）(45) と，それを支える絶対的条件として，身体を伴った全体としての自我の存在が，刻印されているのである．人間にとっての出来事である「邂逅」という現象は，こうした「自己関係性」ともい

うべき事態が把握されることによって，初めて根本的に解明されたと言えるであろう[46]．現象学的超越論的方法は，そこに到達しようとするが，それは言語論的考察にとっては，無縁の動機づけと言えるかも知れない．一方，フッサールにおいては，具体的な言語使用の体系的考察という観点が欠如している．それゆえ，彼の意味概念の示唆する公共性から言語への道は，閉ざされているかに見えるのである[47]．フッサールと，反・自然主義的態度を共有するウィトゲンシュタインの試みたような言語論的考察は，フッサール的な「意味」に生活世界的なカテゴリーを与えて，体系的解明に導く，補完的役割を果すことになるのではないだろうか．

その限りで，その隔たりは，むしろ意味考察における理念と具体性のダイナミクスを生み出す契機となるように思われる．しかしこの予測についての考察は，他日に譲りたいと思う．

注

(1) 本論は，1993年の日米現象学会（東京大学，1993年10月）で発表された“Noema and Grammar”に基づいて書かれ，1995年日本哲学会（國學院大学1995年5月）で発表された原稿に加筆修正したものである．［なお本稿の発表に当ってご助力下さった方々，とりわけ貴重なご教示を下さった慶應義塾大学 石黒ひで教授，京都大学 竹市明弘教授にこの場を借りて御礼申し上げます．］

(2) Sokolowsky, R., *The Formation of Husserl's Concept of Constitution*, Martinus Nijhoff, 1970, pp. 150–3.「実在との邂逅」(encounter with reality) という言葉については，ソフロフスキーに負う．ソフロスキーは，意識と実在世界との合理的邂逅の場として知覚を考察する．そしてその基底的層としてヒュレーを構成の問題の一つの難点であり，発生的考察への動機付けを与える概念としても考察している．本論は，この考察に触発されたものだが，考察の焦点は異なっており，知覚の基底としての感覚的経験も，フッサールにおいては現象学的な問題として取り扱われたということに注目する．

(3) Ref., Putnam, H., *Reason, Truth and History*, Cambridge University Press, 1981, pp. 1–22.（野本和幸他訳『理性・真理・歴史』法政大学出版局，1994年．）

(4) ここでは，“ur-”に「原的」，“ursprünglich”に「原本的」を，そして“originär”には「根源的」の訳語を当てることにする．

(5) 『イデーンI』における「根源的経験」という知覚の位置づけは，その後の発生的現象学においても，根本的には一貫している．このことは例えば上記の『現象学的心理学』でも知覚は「志向性の最初の形態」をなす領域と捉えられていることからも明かであろう（*Husserliana IX*, s. 167.（以下Husserliana は，Hua と略記し巻号を続けて記す））．

(6) フッサールは，しばしば「感覚与件」とヒュレーを言い換えている．これは，フェレスダールが指摘するように，「まずい用語選択」であったと言えよう (Føllesdal, D., “Brentano and Husserl,” in Dreyfus, H. L., ed., *Husserl, Intentionality, and Cognitive Science*, The MIT Press, 1982, p. 40). なぜなら，「センス・データ」は，周知のように，20世紀の経験主義的哲学においては，要素論的な感覚への還元主義と，外的世界と感覚経験との一対一対応が取り出せるという，原子論的な考え方を示唆するからだ．ラッセルが彼の『哲学の諸問題』の序文でムーアの「センス・データ」の考え方に賛意を示しているのは，1912年であるから (Russell, B., *The Problems of Philosophy*, Oxford University Press, 1912/59/70, p. vii)，フェレスダールの，フッサールが同時代の哲学者の仕事をよく読んでいないと言う指摘は当たっているかも知れない．しかしフッサールの言う「感覚与件」を現象主義的に受け取ることが「誤解」であるという彼の指摘の方が重要であろう．

(7) Hua III, 1（以下ID I），§146, s. 337.『イデーンI』からの引用は，渡辺二郎訳（みすず書房，1979/84年）を参照した．本文の文脈によってかなり省略して引用し，訳文を手直しした部分もあるが，訳者の方のご寛恕を乞いたいと思う．

(8) ID I, §41, ss. 84–6.

(9) ID I, §85. また，この機能的観点からすると「ヒュレー」は，志向的なものではもはやなく，志向性の基底層であるとともに，志向的能作の限界を示す概念である (Ref., Bachelard, S., *La Logique de Husserl —Étude sur Logique formelle et logique transcendentale*, Presses Universitaires de France, 1957). この考え方は発生的現象学において基本的には変わっていないと言えよう．たとえば1925年の夏学期の講義をまとめた『現象学的心理学』において「ヒュレー的与件」とは，知覚の領域に主観的に与えられる「志向的性格を全く持たないもの」であって「意識的機能の材料 (Materie)」とされている (Hua IX, ss. 166f.).『受動的綜合の分析』では，「原本的連合 (ursprüngliche Assoziationen)」がヒュレー的感覚性の領野で起こる過程

が分析されるが，そのヒュレー的なものの領域もまた「原的領野(Ursphäre)」と記されている (Hua XI, §§32–40; ss. 151, 185).

(10) Ref., Quine, W. v. O., *Word and Object*, The MIT Press, 1960, §8.（大江晃，宮館恵訳『ことばと対象』勁草書房，1984年，p. 51.）クワインは，個々の感覚与件ではなく，「絶え間のない刺激」(barrages) を問題としている．これは彼の全体論との関連で考えられるわけである（たとえば理論は全体としてその周辺部 (periphery) において経験と接している）．Ref., Dummett, M., *Frege—The Philosophy of Language*, Duckworth, 1981, Chapter 17; 前掲書『ことばと物』の訳者宮館恵の解説，pp. 487–497; 飯田隆『言語哲学大全 II』（勁草書房，1989年）第3章の5など参照.

(11) 「自然主義的転回」(naturalistic turn) という言葉については，*The Concise Encyclopedia of WESTERN PHILOSOPHY AND PHILOSOPHERS*, J. O. Urmson and J. Reé eds., Unwin Hyman, 1989, p. 12. を参照した．この考えを代表するクワインの「認識の自然化」の中で示された考え方については一つの議論の流れができている (“Epistemology Naturalized,” in his *Ontological Relativity and Other Essays*, Columbia Univerisity Press, 1969, pp. 69–90). 野家啓一『科学の解釈学』（新曜社，1993年，pp. 213–234）にその事情が述べられている．Ref., Cresswell, M. J., “Can Epistemology be Naturalized?” in Shahan, R. W. and Swyer C., eds., *The Essays on Philosophy of W. v. O. Quine*, The Harvester Press, 1979, pp. 109–118.

(12) Føllesdal, D., “Meaning and Experience,” in S. Guttenplan, ed., *Mind and Language*, Wollson College Lectures, 1974, pp. 25–44; Føllesdal, “Brentano and Husserl on Intentional Objects and Perception,” in H. Dreyfus, Ibid., pp. 31–41.

(13) フェレスダールが “inform” としている『イデーン I』の箇所は原語では「形を与える」という意味の “formen” が使われているので，例えばバシュラールでは “informer” と訳されているが (Bachelard, Ibid., p. 304)，これも「知らせる」の方の意味ではないと私は考える.

(14) 発生的現象学では，そうした現出を可能にする身体そのものが，空間的なものすなわち「知覚される空間事物」ではなく，「主観的に動く身体」として，いわゆる「運動感覚」のシステムに即して考察されるべきであるとされる．「私」は，自由な「私は，できる」の意識の中に，この身体システムを持つのである (Hua XI, ss. 13–4).

(15) ID I, §52, ss. 114f.

(16) ID I, §97, s. 227.

(17) ID I, §41, s. 86; §42, s. 87.

(18) Sokolowski, Ibid., p. 180.

(19) 『受動的綜合の分析』や，とりわけ『経験と判断』においては，感覚経験が，発生の基底的な層を形成する「受動的総合」として考察されているが，ヒュレーを「契機」として捉える『イデーンI』の観点は，この「受動性」の考察への手がかりを有していたと私は考える．ヒュレーの志向的経験の全体的構造における一つの論理的役割が，意識能作に先だって「与えられるもの（与件）」という点にあったからだ．

(20) ID I, §98, s. 230f.

(21) ID I, §124, s. 286.

(22) ID I, §126, s. 291. モハンティのいうように，フッサールは，ノエマ的意味と言語的意味を同一視してはいない (Ref., Mohanty, J. N., *Husserl and Frege*, Indiana University Press, 1982, p. 75).

(23) Tugendhat, E., *Traditional and Analytical Philosophy*, translated by P. A. Gorner, Cambridge Univ. Press., 1982, pp. 70–75. トゥーゲントハットへの「反・批判の試み」と，ノエマ概念を巡る議論の立ち入った検討が，宮原勇『現象学の再構築』（理想社，1988年，pp. 98–130, 131–175）に整理されている．拙論「ノエマと〈意味〉」（『現象学年報9』日本現象学会，1933年，pp. 81–99）参照．

(24) フェレスダールの解釈を発展させたスミスとマッキンタイアーによるノマエ的意味の言語的意味としての解釈も，個別的対象の指示に関してプラグマティカルな文脈である「背景的信念構造」を持ち出さざるをえなかった点で，自然主義的傾向を含んでいると言えよう．Ref., Smith, D. W. & McIntyre, R., *Husserl and Intentionality*, D. Reidel Publishing Company, 1982, p. 221.（またこの自然主義的傾向を宮原勇は，「自然的因果的秩序という物理的原理をちらつかせての志向性に関する意味論は，物理主義的存在論の持っている存在論的素朴性から脱しきれずにいる」と批判している（前掲書，p. 134，参照）.）

(25) Hintikka, J., *The Intentions of Intentionality and Other New Models for Modalities*, D. Reidel Publishing Company, 1975, pp. 201–5. ヒンティッカは，ヒュレーにおいてすでに直接に概念的把握がなされているので，ヒュレー的与件をノエシスが把握するというのは，冗長であると言う．確かにフッサールは受動的綜合の考察において「最低限の能動性」を触発に応じる受容性に認めている．しかし，ここでも素材的なものが与件として与えられているという機能的な位置づけには変わりはない．もし受動性をすべて意識

の概念作用と読み直すなら，「実在との邂逅」は「実在の構成」となる．ここに「全知覚の爆発」（フェレスダールではノエマの爆発）はなく，知覚の修正の可能性，検証の可能性は説明できないだろう．（Ref., Husserl, *Erfahrung und Urteil*, Felix Meiner, 1972, s. 83; Hua XI, s. 151; 拙論「受動的綜合の問題」『哲学』（三田哲学会編，1983年）p. 37.）可能世界的意味理論はフッサールの「志向性」概念の批判であると共に，言語的指示の問題への新たな提言をおこなうものである．志向性を概念性と解して，フレーゲ的Sinnを存在者ではなく関数とする．概念性としての志向性（内包性）がこの関数である．そして概念（意味）が関数として，対象の与え方を決めているとされる．

(26) Baker, G. P. and Hacker, P. M. S., *Wittgenstein—Meaning and Understanding*, Basil Blackwell, 1983, Chapter V (p. 82).

(27) Wittgenstein, L., *Philosophische Untersuchungen*, Basil Blackwell, 1968,（藤本隆志訳『哲学探究』ウィトゲンシュタイン全集8，大修館，1976年；黒崎宏訳『ウィトゲンシュタイン/哲学的探求』産業図書，1993年）（PUと略）§§244–6.

(28) PU, §275（『ウィトゲンシュタイン/哲学的探求』pp. 189f.）.

(29) Ref., PU, §109．また『ウィトゲンシュタイン/哲学的探求』p. 44, §53への訳者の注を参照してほしい．

(30) PU, §272（『ウィトゲンシュタイン/哲学的探求』p. 198）.

(31) Ref., PU, §293.

(32) PU, §284.

(33) Hua XXIV, s. 216.

(34) ID I, §141, s. 327.

(35) Ref., PU, §136.

(36) 村田純一『知覚と生活世界』（東京大学出版局，1995年）p. 11.

(37) Dummett, M., *Origins of Analytical Philosophy*, Harvard Univ. Press, 1994, pp. 66–7.

(38) 「直示的定義」の見直しが施回の軸となり「文法の自律性」への転回がなされたと言える (Ref., Baker and Hacker, Ibid., p. 82).

(39) 「命題態度 (propositional attitudes)」とはラッセルが初めて使い，クワインが一つの議論として仕上げた概念．ある種の動詞（信じる，知っている，など）で，間接文の文脈を作る他動詞を使う話し手の態度のこと．Ref., Russell, B., "Logical Atomism (1918)," in his *Logic and Knowledge*, The Macmillan Company, 1977, p. 218; Quine, "Quantifiers and Propositional At-

titudes," in his *The Ways of Paradox and Other Esssays*, Harvard University Press, 1976, pp. 185–196; 野本和幸『現代の論理的意味論：フレーゲからクリプキまで』岩波書店，1988年，pp. 60–1.

(40) 言語の「公共性」と「私的言語」の問題を巡って，フッサールとウィトゲンシュタインを比較する試みがなされている．本論では私的言語の問題はあくまでも直示的定義から文法的考察への施回という事情に関連してのみ問題としたためこれには立ち入らなかった．以下の文献を参照してほしい．Cunningham, S., "Husserl and Private Language," in *Philosophy and Phenomenological Research*, (PPR と略)，XLIV, No. 1, 1983, pp. 103–111; Hutcheson, P., "Husserl's Alleged Private Language," in PPR XLVII, No. 1, 1986, pp. 133–136; Reeder, H., *Language and Experience*, University Press of America, 1984, pp. 47–8, 94; Cunningham, *Language and the Phenomenological Reduction of Edmund Husserl*, Martinus Nijhoff, 1976; Ref., Wright, C., "Kripke's Account of the Argument against Private Language," in *The Journal of Philosophy*, LXXXI, No. 12, 1984, pp. 759–778.

(41) PU, §30.

(42) PU, §7.

(43) PU, §90.

(44) 拙論「ウィトゲンシュタインと超越論的哲学」および野家啓一「「複眼的視座」の必要性」『現代思想』13–4号，青土社，1985年，pp. 190–209，を参照．その他，野家啓一『無根拠からの出発』勁草書房，1993年，p. 260，注(21)；中田光男「ゲームと歴史的招命，上」『思想』785号，岩波書店，1989年，p. 38；古田裕清「超越論的なるものを巡って」『理想』644号，1989年，p. 17．などを参照．

(45) 千田義光「フッサールの様相論」哲学会編『様相の問題』有斐閣，1982年，pp. 71f.; Ref., ID I, §141, s. 327.

(46) 「自己関係性」の概念については議論のあるところだがここでは，すでに常に自我が居合わせているという事態が，実在世界と意識との本質必然的な関係であるということを意味する．その「関係性」があるだけで，われわれが反省し得るのはこの「関係性」に止められるのではないかと私は考える．そのように考えれば，「超越論的主観性」そのものを反省する絶対的反省を求める「超越論的主観性」は，鏡の中の虚像とも言えよう．ここに「見る」から「聞く」への施回の軸を探すことも可能となろう．この問題に関する議論は，むろんこれほど簡単ではなく，論者の御批判を仰ぎたい．

(47) フッサールは，知覚によって知られたことを「意味 Sinn」に固定する，と

言っている (Hua XI, s. 12). こうした「意味」は，前言語的な受動的領域に働く原理，沈澱の類型性などとして考察される．またそれらは，客観的世界の構成における知覚の「共同化」(Vergemeinschaftung) において決定的な役割を果たす (Hua VI, §47, s. 166). ここに具体的言語考察への手がかりがあると私は考える．

* 本稿で引用，参照した Husserliana (Martinus Nijhoff 刊) の表題と刊行年は次の通り．

Hua III, 1: Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologische Philosophie, 1976.

Hua VI: Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendentale Phänomenologie, 1976.

Hua IX: Phänomenologische Psychologie, 1968.

Hua XI: Analysen zur Passiven Sythesis, 1966.

Hua XXIV: Einleitung in die Logik und Erkenntnisstheorie Vorlesungen 1906/07, 1984.